

西行法師の和歌と神奈川とのかかわり

津久井 勤

一・西行の生涯概要

西行は藤原北家魚名流と伝わる俵藤太秀郷の末裔である。確か、秀郷は、平将門の乱を鎮圧したことでよく知られている人である。

紀伊国那賀郡に広大な莊園を有し、都では代々左衛門尉檢非違使を勤めた佐藤一族の出である。俗名は義清で、年少にして徳大寺家の家人となり、実能待賢門院の兄とその子公能に仕える。保延元(一一三五)年十八歳で、兵衛尉に任ぜられ、その後、鳥羽院北面の武士として活躍。平清盛と同年代である。

ところが、保延六年、二十三歳で出家する。出家後は嵯峨野の小倉山、鞍馬山、奈良の吉野山や高野山、伊勢にも居住し庵を結んでいる。この出家の原因については、いろいろ取沙汰されているが本当のところは良く判っていない。判っているのは和歌に傾聴していく傍ら四国中国の旅と、陸奥・出羽への二回の旅が知られている。

勅撰集にも多数入集しており、新古今集に九十四首と最も多い歌人であり、勅撰集には二百六十七首入集している。

先に述べたように、徳大寺家との繋がりが、待賢門院周辺の女房たちとの交流がある。

最晩年は河内の弘川寺に草庵を結び、間もなく病で、建久元(一一九〇)年二月十六日に入寂した。七十三歳であった。かつて、「願はくは花

の下にて春死なむその如月の望月の頃」と詠んだそのまま実現した如くの大往生であった。

百人一首八十六番歌

嘆けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな

二・待賢門院の周辺

二・一 西行の出家

西行(俗名・佐藤義清)がどうして出家したかについては、いろいろ取り沙汰されているが、その理由はつかめないでいる。出家時には妻子のことを弟に託していることや、その後も子供のことには世話を焼いているところがある。小説「西行花伝」(著 辻邦生)では、待賢門院との失恋がきっかけなどを持ち出している。ただ、待賢門院は西行より十七歳年長であり、一方、堀河(百人一首 八十番歌)の方は、説がさまざまであるが、少なくとも二十歳以上年長であろうと見られている。現在ならともかく当時においてこの年齢差において契りを結ぶことに疑問が残る。また、西行と堀河の歌の贈答は、出家後のことである。しかし、山家集に於いて恋の歌が多いことから憶測を呼んでいる所以である。しかし、和歌以外に残されているものが無いがゆえに前記のように、家族まで捨てて若くして出家したきっかけが判っていない。

山家集からみて、義清時代には、徳大寺出の待賢門院を遠くから眺めている状況であり、女房との歌のやり取りも、待賢門院の落飾後の頃からになる。ただし、昔を偲ぶ述懐歌があり、具体的な女性は特定できないが、このあたりにヒントが隠されているのかもしれない。

・惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ
・そらになる心は春の霞にて世にあらじとも思ひたつかな

出家後の心境

・捨てたれど隠れて住まぬ人なればなほ世にあるに似たるなり

・世の中を捨てて捨て得ぬ心地して都離れぬ我が身なりけり

二・二 恋の歌

・面影の忘らるまじき別れかな名残を人の月にとどめて

・知らざりき雲居のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは

・弓はりの月にはづれて見しかげの優しかりしは何時か忘れむ

二・三 堀河局との交流

詞書…待賢門院かくれさせおはしましける御あとに、人々またの年の御はてまで候はれけるに、南面の花散りける頃、堀河局の許へ申しおくりける

・尋ぬとも風のつても聞かじかし花と散りにし君が行く方を(八五〇)

返し

・吹く風の行く方しらするものならば花と散りにし君が行く方を(八五一)

詞書…堀河局仁和寺に住みけるに、参るべきよし申したりけれども、まぎることありて、程経にけり。月の比、前を過ぎけるを聞きて、いひ送られける

・西へ行くしるべと頼む月影のそらだのめこそ甲斐なかりけれ(九二六)

返し

・さし入らで雲路をよぎし月影は待たぬ心ぞ空に見えける(九二七)

詞書…待賢門院の堀河局、夜を遁れて西山に住まると聞きて尋ね参りたれば、住み荒したるさまに、人の影ももせざりしかば、あたりの人にかく申し置きたりしを聞きて、いひおくられたりし

・しほなれし苦屋も荒れてうき浪に寄る方もなきあまと知らずや(八二二)

返し

・苦の屋に浪立ち寄らぬけしきにてあまり住み憂きほどは見えにき(八一

三)

堀河

・この世にて語らひおかむ不如帰死での山路のしるべともなれ(八一八)

返し

西行

・不如帰なくなくこそは語らはめ死での山路に君しかからば(八一九)

注…詳しい年代は不明であるが、その後かなり年を経ての事らしい。

三・ 旅と和歌

三・一 第一回の陸奥の旅

出家は二三歳(一一四〇年)で、最初の陸奥の旅は一一四七年、三十歳頃と見られている。

①陸奥へ修行してまかりけるに、白河の関に泊まりて、所がらにや常よりも月面白くあはれにて、能因が秋風ぞ吹くと申しけむ折、何時なりけむと思ひ出でられて、名残おほく覚えければ、関屋の柱に書きつけける

白河の関谷を月のもる影は人の心をとむるなりけり

関に入りて、信夫と申す渡り、あらぬ世のことに覚えてあはれなり。都出でし日数思ひ続けられて、霞と共にと侍ることの跡たどりまで来にける、心ひとつに思ひ知られて詠みける。

都出でて逢坂こえしをりまでは心かすめし白河の関

注…能因法師の続拾遺集五一八を踏まえている。

陸奥ににまかりて下りけるに白河の関にてよみ侍りける

都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

②実方の塚を訪ねて

陸奥にまかりたるけるに、野の中に常よりもとおぼしき塚の見えけるを、人に問ひければ、中将のみ墓と申すはこれがことなりと申しければ、中将とは誰がことぞとまた問ひければ、実方の御異なりと申しける。いと悲しかりけり。さらぬだにもあはれに覚えけるに、しも枯れがれの

すすき、ほのぼの見え渡りて、のちに語らむも、言葉なきやうにおぼえて

朽ちもせぬその名ばかりを留め置きてかれ野の薄形見にぞ見る

注：実方は相模の地とも縁が深く、実方姓の方がいらつしやいます。

実方の百人一首の五十一番歌

かくとだにえやはいづきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを

三・二 四国の旅

一一六八年、五十一歳で四国の白峰陵に参拝する。ここは、一一五六年の保元の乱で敗れた崇徳院が流され、一一六四年に崩御し、埋葬されているところである。

讃岐に詣でて、松山の津と申すところに、院おはしましけむ御あと訪ねけれど形もなかりければ

松山の浪に流れて来し船のやがてむなしくなりにけるかな

松山の浪のけしきは変らじをかたなく君はなりましにけり

白峰と申しけるところに、御墓の侍りけるに参りて

よしや君昔の玉のゆかとてもかからむ後は何にかはせむ

参考：崇徳院の讃岐で詠んだ歌と百人一首七十七番歌

思ひやれ都はるかに沖つ波立ちへだてたる心細さを

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ

三・三 二度目の東北の旅

二度目の東北の旅は、東大寺の大仏建立のため重源上人に依頼されての奥州藤原氏に砂金勧進の旅である。既に西行は、六十九歳になっていた。この途中で、源頼朝に逢っている。四、一節参照。

旅の途中で詠んだ歌

東の方へ相識りたりける人の許へまかりけるに、小夜の中山見しこと

の昔なりける。思ひ出でられて

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

東の方へ修行し侍りけるに、富士の山を見て

風になびく富士の煙の空に消えて行く方も知らぬ我が思ひかな

三・四 弘川寺に草庵

東北の旅から帰った後、七十歳で「御裳濯河歌合」を編み、判詞を俊成に依頼してその年に成立している。その後続いて「宮河歌合」を編み、判詞を定家に依頼している。二年後に成立を見る。この時には、西行は、弘川寺にあつて、病床の身であった。そのため定家がここを訪れて渡している。その翌年にここで亡くなっている。現在西行の墓と、西行堂が残されている。

①「御裳濯河（みもすそがわ）歌合」の俊成の判詞から

七番 左 持

願はくは花のもとにて春死なむその如月の望月の頃

右

来む世には心の内にはあらはさむあかみやみぬる月の光を

判詞

左の、花のもとにてといひ、右の、来む世にはと云へる、心は共に深きに取りて、右は、うちまかせてよろしき歌の体なり。左は、願がはくと置きて、春死なむといへる、うるはしき姿にはあらず。この体にとりて、上下相叶ひて、いみじく聞ゆるなり。さりとして深く道に入らざらむ輩は、かく詠むとせば、かなはざること有りぬべし。これはいたれる時のことなり。姿相似ざるといへども、なずらへて持とす。

十八番 左 勝

大方の露には何のなるならむ袂におくは涙なりけり

右

心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ

判詞

鳴立つ沢のといへる、心幽玄に、姿及び難し。但、左歌、露には何のといへる詞、あさきに似て心ことに深し。勝と申すべし。

二十八番 左 持

嘆けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな

右

知らざりき雲井のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは

判詞

左右両者、ともに心深く、姿優なり。よき持とすべし。

②「宮河歌合」の定家の判詞から

七番 左

山桜かしらの花に折り添えて限りの春の家づとにせむ

右 勝

花よりは命をぞなほをしむべき待ちつくべしと思ひやはせし

判詞

左の、限りの春といひ、右の、命をぞ猶といへる、いづれもあはれ深くは待るを、頭の花にとおける、この歌にとりてはさこそはと見ゆれど、雪霜などは常に聞きなれたることなるを、花といへるも有ることにはあれど、いかがと聞こえ侍るにや。大方は、歌合のために詠み集められたる歌に侍らねば、かやうのこと強いて申すべきにあらねど、右歌、耳に立つ所なきにつきて、勝と申すべし。

八番 左

惜しまれぬ身だにも世にはあるものをあなあやにくの花の心や

右 勝

憂き世にはとどめおかじと春風の散らすは花を惜しむなりけり

判詞

右、花を思ふあまりに、散らす風を恨みぬ心、まことに深く侍る上に、左、あなあやにくのとおける、人つねに詠む詞には侍れど、わざと艶なる詞にはあらぬにや。散らすは花をなどいへるは、猶まさり侍らむ。

九番 左 勝

世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかもせむ

右

花さへに世を浮き草になりにけり散るを惜しめば誘ふ山水

判詞

右歌、心、詞にあらはれて、姿もいとおかしう見え侍れば、山水の花の色、心も誘はれ侍れど、左歌、世の中を思へばなべてといへるより、終わりの句の末まで、句ごとに思ひ入れて、作者の心深く、なやませるところ侍れば、いかにも勝ち侍らむ。

四、西行と神奈川の関わり

四、一 頼朝とのかかわり

西行法師は二度目の奥州への旅の途中で、頼朝にあってゐる。この事情を吾妻鏡に出ている。文治二（一一八六）年八月十五日頼朝が鶴ヶ岡八幡宮に参拝の折、鳥居のあたりに怪しい老僧が徘徊しているのを梶原景季が問いただしたところ西行で、頼朝が御所に招いて会談した。兵法や和歌について尋ねている。最初は拒んでいたが、結構おしゃべりになり、会談は夜遅くまで続いた。その内容を藤原俊兼に下取らせたとある。翌日も引き留められたけれども退出されたので、銀の猫を贈った。

しかしこの銀の猫を通りて遊んでいた嬰兒に与えたという。この銀猫碑が鴨立庵にある。鎌倉流鎬馬が行われるようになったのはこの後のことで、西行の話が関係していると見られている。西行が鎌倉に来たのは頼朝の器量を見極めるためとも言われており、頼朝としても奥州藤原氏らの動向も気になっていたことと思われる。

四・二 県内のゆかりの地を訪ねて

①大磯町の鴨立庵

ここには、佐々木信綱筆による「こころなき身にもあはれは知られけり 鴨立つ沢の秋の夕暮れ」（新古今集三夕の歌の一つ。西行物語では相模の国で詠まれた歌としているが、不明）の歌碑のほか、円位堂には西行の旅姿の立膝像や笠懸けの松がある。また、この和歌はJR大磯駅前や郷土資料館の展示室壁面にもある。

②伊勢原市高森の個人宅には山家集の

「梅が香にたぐへてきけば鶯の声懐かしき春の山里」の歌碑が

③相模原市緑区若柳の正覚寺には山家集に見られる歌碑がある

「吾妻路や間の中山ほどせばみ心の奥の見ゆばこそあらめ」

④藤沢市辻堂熊の森権現社付近には

「柴松の葛のしげみに妻こめて砥上ケが原に牡鹿鳴くなり」

⑤茅ヶ崎市中海岸には

「芝まとふ葛のしげみに妻こめて砥上ケが原に牡鹿鳴くなり」

④と⑤はいずれも西行物語からのようで、西行の歌かどうかは不明。

五・まとめ

新古今集は後鳥羽院の基で、定家らが撰者に名を列ねている勅撰集である。しかし、後鳥羽院の意向の強い歌集でもある。このことはともあれ、西行の歌は九十四首入首している。

後鳥羽院の西行評は「ありがたくいできがたき方も、共にあひかねてみゆ。生得の歌人と覚ゆ。おぼろげの人、まねびなどすべき歌にあらず。不可説言語の上手也。」

「西行の研究」の著者窪田章一郎は、後鳥羽院の評をここで云う「いだがたき」は「ありがたく」と同義語であるし、「生得の歌人」ということと同格になっている。「まねびなどすべき歌にあらず」も、「不可説言語の上手」も、「生得の歌人」を言い換えているのであるから、批評の内容は、言葉としては単純・明確で、力強いものである。そして、院にあっては、その歌が「おもしろくして、しかも心も殊に深く」という状態で受容されたものである。と説明している。

西行について述べれば、その切り口が多くなかなか全容を述べるのは難しいが、その一端でもご紹介できればと思っている。

六・参考文献

- ①窪田章一郎著「西行の研究」東京堂（一九六一）
- ②日本文学研究資料刊行会編「西行・定家」有精堂出版（一九八四）
- ③浜田建治著「神奈川の文学碑」公孫樹舎（二〇一一）
- ④島津忠夫・櫛原聰編著「カラー小倉百人一首」京都書房（二〇〇五）
- ⑤辻邦生著「西行花伝」新潮社（一九九五）
- ⑥沢木慎太郎紹介「桜×紅葉の穴場！ 西行永眠の弘川寺は南大阪のパワースポット」LINEトラベル.jp旅行ガイド
- ⑦記念誌編纂委員会編「さがみの風2」神奈川県歴史研究会 p.181（二〇一三）
- ⑧新編国歌大観編集委員会編「新編国歌大観」角川書店（一九八三）